

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Semantic Discrepancy and Irregular Forms(3) —the Case of “woodpecker” in Chinese Dialects—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 斎, OTA, Itsuku メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1881

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



指示対象のズレと特殊な語形変化（3） ——「キツツキ」及びその関連語彙を対象に——

太田 斎

§ 7.1. ‘啄木鸟’ ←→ “臭椿”、“臭椿莢果”（§6.2.の補遺その1）

“戴胜ヤツガシラ”、“斑鳩キジバト”の“臭咕咕”、“椿象カヘムシ”の“椿姑姑”といった語形は、“臭椿”、“臭椿莢果”を意味する“椿谷谷：ニワウルシ、ヌルデの木、若しくはそのさやに入った果実”（第二、三音節が ku の重ね型になっているものは様々な漢字表記がなされている）との間で起こった類音牽引によって、転用もしくは混同らしき状況が生じていると解釈する余地がある。以下、これについて検討する。管見の及ぶ限りで、これに關係しそうな例は以下の通り。

“臭椿莢果”

山东阳谷：椿呱嗒儿 $t\dot{s}^h u\tilde{o}^{13}$ kua^{13-21} $tlar^0$ 椿树结的扁形果实。莢果和种子
都呈扁形 研究 128

Cf.花骨头儿 xua^{13} ku^{13-21} $t^h lour^0$ 蓼薔 研究 127

树疙瘩 fu^{312-21} $kə^{13-21}$ ta^0 从树干的第一发根处向下的部分 研究 128

糟疙瘩子 $tsə^{13}$ $kə^0$ ta^{13-21} tsl^0 痘疮 研究 169

疙瘩 $kə^{13-21}$ ta^0 用面做成的小球状食品，煮熟食用 研究 175

山东平邑：椿谷谷 $p\dot{f}ən^{213-21}$ ku^0 ku^0 臭椿莢果 山东方言词典 79

河北清河：椿鼓鼓 椿树籽 707

河南获嘉：椿古古 $t\dot{s}^h un^{33-31}$ ku^{13} ku^{33} 椿树的种子 研究 226

陕西岐山：椿姑姑 $_t\dot{s}^h \theta\eta _ku _ku^0$ 椿树的果实 691

山东高密：谷谷儿 ku^{44-21} kur^{14} 臭椿莢果 山东方言词典 79

“戴胜”

山东博兴：臭咕咕 $t^h o^{21}$ ku^{53-55} ku^0 戴胜（陈户镇） 黄河三角洲 168

吉林通化二道江区：臭咕咕（/ gúgu /） 戴胜 620

黑龙江哈尔滨：臭咕鸪 $t\dot{s}^h ou^{53}$ ku^{24} ku^0 戴胜 词典 250

河北滦南：臭咕咕 $t\dot{s}^h \theta u^{55-53}$ ku^{33} ku^0 戴胜 819

河北深泽：臭咕咕 $t\dot{s}^h \theta u^{31}$ ku^{33} ku^0 571

宁夏银川：臭咕咕 $t\dot{s}^h \theta u^{13}$ ku^{44} ku^0 戴胜，一种夏候鸟。嘴细长而弧曲，

舌短呈三角形。头顶具有扇形棕色冠羽，
体羽斑驳，翅宽圆，尾方形，翅和尾均具
黄斑。栖息活动于村庄、田野，性不畏人，
食昆虫 词典 206

山西和顺：臭胡胡 $t\dot{sh}\theta u^{41}$ xu^{22} xu^{22-21} 鸟名，亦名戴胜 61

“斑鳩”

新疆乌鲁木齐：臭包包 $t\dot{sh}v\theta u^{44}$ $p\dot{sh}^{21}$ $p\dot{sh}^{24}$ =斑鳩 回民 98

新疆乌鲁木齐：包包鵠 $p\dot{sh}^{21}$ $p\dot{sh}^{24}$ $t\dot{sh}^h\gamma^{24}$ =斑鳩 回民 98

“布谷鸟”

山东曲阜：春谷谷 $ts^hu\tilde{\theta}^{213-13}$ $ku^{213-211}$ ku^0 布谷鸟 63

山东兗州：春谷谷 $ts^hu\tilde{\theta}^{213-13}$ ku^{312-31} ku^0 布谷鸟 848

山东历城：春谷谷 布谷鸟 449

山东济阳：春谷儿谷儿 布谷鸟 587

内蒙锡林浩特：臭卜姑 布谷鸟 (太仆寺旗) 1841

河北张北：臭八姑 大杜鹃 659

河北尚义：臭鹁鸪 $ts^h\theta u^{24}$ $pa?^{21}$ ku^{31} 杜鹃 1012

“啄木鸟”

山西新绛：臭关关 $t^h\theta u^{31-51}$ $ku\tilde{a}^{53-11}$ $ku\tilde{a}^{53-31}$ 啄木鸟 35¹

Cf. “臭~气” $t^h\theta u^{31}$ 19

陕西洋县：牵拐拐 t^hian $kuai$ $kuai$ 啄木鸟 777²

山西平鲁：锛咕咕 $p\dot{ey}^{53}$ ku^{33} ku^{33} 啄木鸟 81

甘肃武威：咕咕头 啄木鸟 763 = “斑鳩”

「ニワウルシの木」は悪臭を放つので、その葉が食用に供される“香椿(树)”と対比されて、“臭椿(树)”と呼ばれ、そもそもが「臭」と結びついている。“椿树”、“樗树”は方言により、“香椿(树)”と“臭椿(树)”をひっくりめた総称として用いられる場合と、“臭椿(树)”のみを指す場合がある。管見の及ぶ限りでは、“椿树”、“樗树”で“香椿(树)”のみを指すことは無いようである。“咕咕”、“姑姑”、“谷谷”“鼓鼓”、“古古”は今のところ十分な検証ができず、初步的な推測に留まるが、上掲の山西左権方言の例から見て、恐らく「かたまり」を意味する“骨朵 $ku\theta?^h tuv^{42}$ ” (“花骨朵”は「花の蕾」の意) が重ね型の擬音語、親族名称と結び付けられて成立したものだろう。“骨朵”は方言により“圪朵”、“骨嘟”など様々な表記

¹ $t^h\theta u^{31-51}$ 原文は h を欠く。

² t^hian 原文は $tbian$ と誤る。

で現れ、音声形式は概ね [kə(?) tuə~ku tu] となっている。山東陽谷方言の場合は前の音節が [kuə] ではなく、[kua] と外転系主母音である点がうまく説明できないが、同じく「かたまり」の意の“疙瘩 kə¹³⁻²¹ ta⁰”が連音変化で“呱嗒儿 kua¹³⁻²¹ tlar⁰”となったものと考えたい。想定する変化のプロセスは以下の如くである：tʂ^huən kə ta(r)→tʂ^huən ka ta(r)→tʂ^huən kua ta(r)、若しくは tʂ^huən kə ta(r)→tʂ^huən kuə ta(r)→tʂ^huən kua ta(r)。以下、[ku ku] という音声形式を表す“咕咕”、“姑姑”などの表記は特に区別する必要のない場合は、由来の如何を問うことなく、一律に“姑姑”という漢字表記を用いて表記する。この漢字を選んだことに特に理由は無い。

“臭椿(樹)”はまた“樗树”とも呼ばれるので、類音関係から、“樗姑姑”が“臭姑姑”となったとの想定も可能なようであるが、“樗姑姑”も“臭姑姑”も管見の及ぶ限りでは報告例が無い。“臭树姑姑(儿)”はあるから、これから“臭姑姑”が生じる可能性は否定できないが、現時点で集めたデータに基づく限り、「キツツキ」、「九官鳥」などの鳥名の“臭姑姑”は「ニワウルシの木、果実」との類音牽引で生じたとは考え難い。大雑把に概括すると、「ニワウルシの木、果実」は“椿姑姑”、「ヤツガシラ」は“臭姑姑”、「カッコウ」は“春姑姑”が優勢で、「ヤツガシラ」を“春姑姑”若しくは“椿姑姑”とする例は見当たらない。鳥名につく“姑姑”は恐らく鳴き声に由来する擬声語である。「カッコウ」に“臭”が付くのは管見の及ぶ限りで、上掲の3例のみ。いずれも“臭姑姑”ではなく、“臭”と「ハト」を意味する“鶲鵠”とが結び付いたかのような語形である。今はこれらが指示対象の混乱と音声形式の錯綜が生じたことによって、「キツツキ」にも“臭”を冠する語形が生じたと考えたい。“臭”で表記されるそもそもその語源は“鶲”由来の tɕ^hian 又は ts^han か、若しくは“啄”由来の tau が類音の“臊”と解釈され、それが同義語の“臭”に置き換えられたものか。「カッコウ」の“臭”的付く例はいずれも“臭姑姑”という語形にはなっていないから、「ニワウルシの木、果実」の直接の影響で生じたものではないだろう。**§6.2** で既に指摘したが「カメムシ」についても“椿姑姑”はあるが、“臭姑姑”という語形の報告例は皆無で、“臭”がつくのはほとんどが“臭大姐”という語形である。“姑姑”との関連で言えば、“臭”がついて不思議の無い「ニワウルシの木、果実」、「カメムシ」に“臭”が付かず、「カッコウ」や「キツツキ」には“椿姑姑”、“春姑姑”だけでなく、“臭”的つく語形が見られるという、その特性から見れば、一種の逆転現象とも思える状況はどう説明するか。今のところ説得力のある解釈が思いつかない。「ヤツガシラ」の“臭”が「ニワウルシの木、果実」、「カメムシ」の影響で加えられた可能

性が低いことから、この鳥自体が悪臭を放つという語釈（山西万榮の“臭鶲鶲”）は民間語源によるものではなく、科学的根拠があるのだろう³。

「ニワウルシの木、果実」と“戴胜”、「カッコウ」の間には類音牽引が生じているのではないかと思わせる語形が無い訳ではない。

“臭椿莢果”

山东新泰：步步齿儿 $pu^{41} pu^0 t\zeta^h \gamma^{55}$ 臭椿莢果 山东方言词典 79

山东新泰：步步齿儿 $pu^{31} pu^{31} t\zeta^h \gamma^{55}$ 臭椿莢 志 115

山东新泰：步步齿 $pu^{=41} pu^{=31} \bar{t}\zeta^h \gamma^{55}$ 臭椿莢 研究 201

山东滨州：鹁鹁翅儿 臭椿的果莢 705

“戴胜鸟”

山西大宁：布布痴 $pu^{55} pu^{55} t\zeta^h \gamma^{21}$ 戴胜鸟 486

甘肃兰州：卜卜吃 $pu^{53} pu^{53} t\zeta^h \gamma^1$ 戴胜鸟，象其叫声 市志 197

甘肃兰州：卜卜吃 $pu^{53} pu^0 t\zeta^h \gamma^{53}$ 戴胜鸟，一种益鸟。羽毛大部为棕色、嘴细长而稍弯 || 象其声而得名 词典 43

甘肃榆中：步步哧(吃) $pəu^{31} pəu^0 t\zeta^h \gamma^{31}$ 戴胜 741⁴

新疆焉耆：抱抱嗤 戴胜鸟 县志 838

新疆乌鲁木齐：包包吃 $pɔ^{44} pɔ^{44} t\zeta^h \gamma^0$ 一种鸟，羽毛大部为棕色，有羽冠，嘴细长而稍弯。吃昆虫，对农业有益 词典 185

甘肃民勤：勃勃赤 戴胜 809

陕西吴旗：抱抱赤 $pau^{44} pau^{44} t\zeta^h \gamma^{41}$ 一种头部有较大羽冠的候鸟 909

山西永和：□□鵙 $pəŋ^{35} pəŋ^{35-33} t\zeta^h \gamma^{33}$ 一种鸟 研究 135

“布谷鸟”

新疆哈密：包包鵙 $pɔ^{55} pɔ^{51} t\zeta^h \gamma^{21}$ 布谷鸟 137

新疆吉木萨尔：包包鵙 $pɔ^{44} pɔ^{44} t\zeta^h \gamma^0$ 布谷鸟 96

内蒙东胜：包包嗤 布谷鸟 937

新疆乌鲁木齐：包包鵙 $pɔ^{21} pɔ^{24} t\zeta^h \gamma^{24}$ =斑鸠 回民 98

山西娄烦：伯伯翅 $pia?^3 pia?^3 ts^h \gamma^{54}$ 一种鸟 662

山西娄烦：伯伯翅 $piə?^3 piə?^3 ts^h \gamma^{54}$ 一种鸟 研究 76

“啄木鸟”

³ 尾の分泌腺から黒褐色の悪臭を放つ油状の液体を分泌するとある。以下のサイト参照。

“戴胜鸟” <http://baike.baidu.com/view/882948.htm> (アクセス日時 2014.9.23.19:33)

⁴ $t\zeta^h \gamma^{31}$ 原文は $t\zeta^h i^{31}$ と誤る。

陝西安塞： 嘛 嘛 吃	pəŋ ⁵² pəŋ ⁰ ts ^h ɿ ³¹²	啄木鸟	686 ⁵
陝西横山： 崩 崩 吃	pəŋ ³³ pəŋ ³³ ts ^h ɿ ⁰	啄木鸟	648

河北尚义： 哒 哒 虫	pəu ³¹ pəu ²⁴ ts ^h uəŋ ³¹	啄木鸟	1012
河南洛阳： 槆 槆 虫 儿	pəŋ ³³ pəŋ ⁰ ts ^h uəŋ ³¹	啄木鸟	研究 14、143
河北宣化赵川： 铛 铛 虫 子	pəŋ ⁴² pəŋ ¹³ ts ^h uŋ ⁴² zɛe ⁰	啄木鸟	研究 64
河南洛阳： 槆 槆 虫	pəŋ ³³ pəŋ ³³ ts ^h uəŋ ³¹	啄木鸟	研究 143
河南洛阳： 槆 槆 虫	pəŋ ³⁴ pəŋ ³⁴⁻⁴⁴ ts ^h uəŋ ⁴²	啄木鸟	市志 487
山西文水： 槆 槆 雀	pu ²²⁻¹¹ pu ²²⁻³⁵ tç ^h iŋ ⁴²³ e ²²	啄木鸟	II/71-72

河北冀县： 步 步 墩	pu ⁵³ pu ³¹ tuən ²¹³	啄木鸟	719 ← “锵 铛 啄木”？
河北冀州： 步 步 墩	pu ³¹ pu ³¹ tuən ²¹³	啄木鸟	开篇 22/190
河南杞县： 叭 叭 端 子	p ^h a ²⁴ p ^h a ⁰ tuan ²⁴ tsɿ ⁵⁵	啄木鸟	854 ⁶

この場合も「ニワウルシ」の上掲の語形が現れるのが山東であるのに対し、“戴胜”の類似語形が現れるのは西北であって、一つの地域で両者の間に類音牽引が起こっているという訳ではない。類音関係にあるとはいえ、漢字表記にも一致が見られない。地理的な棲み分けの可能性も無い訳では無いが、特に擬声語の重ね型が絡む場合は偶然の一致が起り易いことも否定できない。上掲例を見る限りでは「カッコウ」を表す“锵 铛 虫”が弱化で pau pau ts^h/ts^huəŋ～pau pau ts^hɿ/ts^hɿ のようになって、“戴胜”を表すのに転用され。それが音声形式が更に崩れて山東の「ニワウルシ」に似た語形になったと考えておく。

陝西安塞、横山の「キツツキ」は“锵 铛 虫”が「ヤツガシラ」との混交で成立したものではないか。“锵 铛 雀”は報告例が希少で、“锵 铛 虫”的分布域にあるから、“虫”が弱化した結果、類音の“雀”と認識されるようになったものだろう。

§ 7.2. “斑鳩”の関与

「ニワウルシ」そのものが直接「キツツキ」語形に変容を齎したとは考え難いにしても、「ニワウルシ」と“斑鳩キジバト”との間には類音牽引が見られる。今のところ、一例のみだが、陝西扶風方言の“姑姑等”は「ニワウルシ」と「キジバト」の両方を意味する。これは前者の語形が後者に一致し

⁵ ts^hɿ³¹² 原文は tsɿ³¹² と誤る。

⁶ tsɿ⁵⁵ 原文は tsɿ⁵⁵ と誤る。

たということだろう。このようになる以前の同方言の「ニワウルシ」語形がどのようなものであったか、確たる手掛かりは無い。憶測にすぎないが、「椿姑姑」若しくは“椿姑姑”が「キジバト」の“姑姑等”の影響を受けて“姑姑椿”若しくは“姑姑樗”のような語構成に再解釈されて、それが“姑姑翅”となったものか。但し“椿姑姑”及び“姑姑椿”、“姑姑樗”的実例は見ない。前節で紹介した「ニワウルシ」の“步步齿”と言った語形は、“姑姑翅”と「ヤツガシラ」の“包包吃”、「カッコウ」の“包包鵠”といった語形に平仄を合わせてできたものだろう。或いは「ヤツガシラ」の“包包吃”、「カッコウ」の“包包鵠”の影響で、“椿姑姑”もしくはただの“姑姑”であった「ニワウルシ」が類推で“姑姑翅”、更には“步步齿”的ようになったものか。「キジバト」には“姑姑等”、“姑姑虫”はあるが、“姑姑翅”的実例は見当たらない。“姑姑虫”は弱化で“姑姑翅”となる音声環境にあるが、実例が無いので、「キジバト」との関係だけで「ニワウルシ」が“姑姑翅”、“步步齿”に変化したとは考えられない。やはり「ヤツガシラ」の“包包吃”、“カッコウ”的“包包鵠”も関与したと考えるべきであろう。

“臭椿荑果”

山东高密：谷谷儿 ku⁴⁴⁻²¹ kur¹⁴ 臭椿荑果 山东方言词典 79

陕西扶风：姑姑等 ku³¹⁻⁴² ku³¹ təŋ⁴² 臭椿结的簇生的条形果实 126

Cf. 姑姑等 ku³¹⁻⁴² ku³¹ təŋ⁴² 斑鳩 130

山东青州：姑姑翅 ku²¹⁴⁻²¹ ku⁰ ts^hɿ⁰ 臭椿荑果 山东方言词典 79

← “姑姑樗”？

山东东营：鼓鼓翅 ku²¹³⁻²¹ ku⁰ ts^hɿ²¹³ 檉树的果荑(广南话) 142

← “姑姑樗”？

山东广饶：鼓鼓翅 ku²¹³⁻²¹ ku⁰ ts^hɿ²¹³ 檉树的果荑 870 ← “姑姑樗”？

“斑鳩キジバト”

山东新泰：咕咕 ku⁴² ku⁴² 斑鳩 志 110

山东宁阳：咕咕 ku³¹²⁻⁴² ku⁰ 志 208

斑鳩 pā²¹⁴⁻³¹ tɕiəu⁰ 志 208

河南舞钢：姑姑儿 斑鳩 731

陕西蒲城：咕咕等 ku²⁴ ku⁰² təŋ⁵³ 708

斑斑 pā³¹ pā⁰² 斑鳩 708

陕西蓝田：姑姑等 / əgu əgu ədeng / 斑鳩鸟 648

陕西兴平：鸪鸪等 ku³¹⁻³⁵ ku³¹ təŋ⁵² 斑鳩 811

宁夏银川：鸽鸽登 $ku^{44} ku^0 təŋ^{53}$ 斑鳩 方言志 95

甘肃张家川：姑姑等 $ku^{24} ku^{24-21} təŋ^{42}$ 斑鳩，因其鸣声似“姑姑，等”故
名 1413

陕西西安：鸽鸽等 $ku \cdot ku ^{təŋ}$ 斑鳩 普通 3711

陕西宝鸡：鸽鸽(等) $ku \cdot ku (^{təŋ})$ 斑鳩 普通 3711

新疆哈密：咕咕等 $ku _ku ^{təŋ}$ 斑鳩 普通 3711

新疆乌鲁木齐：咕咕等 $ku _ku ^{təŋ}$ 斑鳩 普通 3711

山西文水：鸽鸽种 $ku _ku tsuəŋ^3$ 斑鳩 县志 704

山西太原：姑姑种 $ku^{11} ku^{11} tsuŋ^{45}$ 一种灰色鸟，比鸽子小，芒种前后飞
翔于田间 FY297

山东鄆城：鸽鸽虫 /gūgūchong/ 斑鳩 620

河南濮阳：咕咕虫 $ku^{33-34} ku^{34} tʂʰuŋ^{452-42}$ 斑鳩 500

§ 7.3. ‘啄木鸟’ ←→ ‘鶲鳩’？(§6.2.の補遺その2)

§ 6.2. で取り上げた語形に、語頭の“鶲”、若しくは“鶲树”に続く二音節の声母が p- k- となっているものがある。この p- k- の二音節の部分は一見、“鶲鳩：ハト”的ような語形になっているが、韻母の形式がこの地域の「ハト」語形のそれとは一致しないから、「キュウカンチョウ」語形が関与して、“鶲鶲鳩”的な混合語形が生じたのではないかと指摘した。漢字表記から見て、「ハト」を意味する他地域で優勢な語形“鶲鳩”的関与も考慮の余地がありそうだが、概ね[pu kə] のような音声形式のこの「ハト」語形は山東では優勢であるものの、河北、河南では“鸽子”的方が優勢で、“鶲鳩”的報告例は多くない。一方、陝西方言の“鶲鳩”由來の「ハト」語形を見ると、殆どの方言で概ね第一音節が[pʰu~pʰə~mə]、第二音節が[kuo~ky]ののような語形となっており、既に指摘したように、韻母の形式が一致しないばかりか、第一音節の声母も異なっている。つまりここで問題としている[pu kə] のような音声形式の“鶲鳩”は山西、陝西に近い地域では優勢語形とは言えないので、ひとまず“鶲鳩”は記述者の語源意識の反映で、現地の人々の意識とは乖離しているものと推測する。つまり“鶲鳩 pu kə”的関与は一先ず否定する。

“啄木鸟”

山西新绛：臭关关 $t^həu^{31-51} kuə̃^{53-11} kuə̃^{53-31}$ 啄木鸟 35⁷

⁷ $t^həu^{31-51}$ 原文 ^h を欠く。

Cf. “臭~气” $t^həu^{31}$ 19

河北定兴：臭磕虫 啄木鸟 河北词汇 118

河北容城：臭锛打 啄木鸟 501

陕西延长：丑卜古 $tʂ^həu^{52}$ $pə^{35}$ ku^0 啄木鸟 598、陕北 140

← “臭包包” + “鹁鸪” ?

陕西洋县：牵拐拐 t^hian $kuai$ 啄木鸟 777⁸山西平鲁：锛咕咕 $pəy^{53}$ ku^{33} 啄木鸟 81

甘肃武威：咕咕头 啄木鸟 763 = “斑鳩”

陕西志丹：树圪巴 啄木鸟 770

陕西吴旗：树圪巴儿 $ʂu^{44}$ $kə?$ 啄木鸟 909陕西吴旗：树圪叭儿 $ʂu^{44}$ $kə?^{3-5}$ $pər^0$ 啄木鸟 陕北 140

山西安邑：嫌剥剥 读为千巴巴，啄木鸟也，食枯木之虫，其声剥剥 47

山西孝义：鵠剥帖 $tç^hiaŋ^{11}$ $pa?^{2-53}$ ku^{11} 啄木鸟 86河北涉县：鵠巴果 $tç^hiæ^{31-33}$ pa^0 kuo^{53} 啄木鸟 7、县志 869⁹Cf. 括巴果 $tç^hia^{31-33}$ pa^0 kuo^{53} 啄木鸟 省志 569山西长治：鵠剥骨 $tç^hiaŋ$ $pa?_{-}$ $kuə?_{-}$ 啄木鸟 普通 3713山西介休：□树脖姑 $tç^hiɛ^{13-11}$ $sɿ^{45}$ $pΛ?^{423-53}$ ku^{13-0} 啄木鸟 27山西平遥：嵌树剥姑 $tç^hiaŋ^{13-31}$ $sɿ^{35}$ $pΛ?^{423-54}$ ku^{13-31} 啄木鸟 民俗 71山西沁源：鵠树八姑子 啄木鸟 472¹⁰山西灵石：鵠树鹁鸪鸪 $tç^hiã^{214}$ su^{53} $pa?^{33}$ ku^{214} ku^{214} 啄木鸟 605山西沁县：秋树□钩钩 $tç^hiəu^{213-21}$ su^{55} $pə?^{4}$ $kəu^{213-42}$ $kəu^{213}$ 啄木鸟 27**“布谷鸟”**

内蒙锡林浩特：臭卜姑 布谷鸟 (太仆寺旗) 1841

河北尚义：臭鹁鸪 $ts^həu^{24}$ $pa?^{21}$ ku^{31} 杜鹃 1012

河北张北：臭八姑 大杜鹃 659

ここで問題となるのは、「キツツキ」には“鵠巴巴”、“鵠包包”、“臭关关”（孤例。§6.2で言及）といった語形はあるが“臭包包”、“臭咕咕”

⁸ t^hian 原文 $tbian$ と誤る。

⁹ 県志の漢字表記は“鵠”が欠けている。他の文献には正しく“鵠巴果”となっているのを確認してあるのだが（音声表記は全く同じ）、情けないことにその文献が何であつたを記録しておかなかつたため、今は只その p.7 に載っているということだけしか分からぬ。とりあえずはその文献に従い、漢字表記を“鵠巴果”としておく。

¹⁰ “鵠”、原文は“鵠”に誤る。

という語形は皆無であるということである。恐らくは、先ず本来「ヤツガシラ」を指す“臭姑姑”と「キュウカンチョウ」の“八哥”的間に混交が生じて、“臭八姑”的な両者の中間形態の語形が生まれ、それが「カッコウ」を指す“春姑姑”との間に指示対象の混乱を生じ、“臭八姑”が「カッコウ」を指すようになり、これが「キツツキ」にも転用されることになったということではないか。上掲の内蒙古シリンホト、河北尚義、張北方言の「カッコウ」語形はこれで説明がつく。“臭八姑”は容易に“臭鶲鵠”と漢字表記し得るような音声形式に変容するであろう。既に指摘したように「ハト」語形の“鶲鵠”的関与は考え難い。このように考えると「カッコウ」に“臭鶲鵠”的な語形はあるが（管見の及ぶ限りで上掲の3例のみ），“臭姑姑”という語形の報告例が全く無いということも説明がつく。

この他に「ヤツガシラ」の“臭姑姑”と“鶲雛雛”由来の、特に漢字表記すれば“鶲巴巴”、“鶲包包”的な「キツツキ」語形とが合体してできた可能性もある。つまり漢字表記すれば、“鶲巴巴キツツキ” + “臭姑姑キツツキ←ヤツガシラ” → “臭巴姑キツツキ”的な変化である。山西孝義、河北涉県などの語形は、“鶲巴巴キツツキ” + “臭姑姑キツツキ←ヤツガシラ” → “鶲巴姑キツツキ”的な同様のプロセスで生じたもう一つの中間形態語形と解釈できる。

中間形態ということでは、“臭姑巴”、“鶲姑巴”的な語形も誕生してよさそうだが、これに該当する実例は見当たらない。上掲の陝西志丹、吳旗の“树圪巴”は或いは“臭姑巴”的バリエーションとも見做せそうな例だが、“鶲树巴巴キツツキ” + “臭姑姑キツツキ←ヤツガシラ” → “鶲树姑巴キツツキ” → “鶲树姑巴キツツキ”的ことかも知れない。そうであれば、“树”と“臭”的類音関係も何らかの触媒作用を果たしたと言えよう。但し“春姑姑カッコウ”、“水姑姑キジバト”などku kuの前に別の要素を冠した鳥名も候補足り得、今のところそれらを排除することはできない。“臭姑巴”、“鶲巴姑”的な語形が皆無と言って良いような状況にあるのは、このような中間形態の語形の成立にはやはり§6.2で紹介した[pa kuo]のような形態の「キュウカンチョウ」語形も関与したからだろう。地域的にも、音声的にも離れてはいるが、「キツツキ」と「キュウカンチョウ」の類音牽引の例として以下のようなものがある。

安徽宿松：啄八狗 tso²² pa⁵⁵ kiəu⁰ 啄木鸟 129 ← “臭包包” ? + “八狗”
 cf. 八狗 pa⁵⁵ kiəu⁰ 八哥儿 129

混交が二つの語ではなくそれ以上の数の語の間で錯綜して起こることについて既に太田 2002 で指摘している。

§7.4. “**锛啄木**” ←→ “**畚锸**” “**插门**”

“**锛啄木**”の第二音節声母が有氣音になっている例が見られる。該当例は以下の通り。“**锛啄**”から“**畚锸もっこ**”への連想が働いたということではないか？遺憾ながら、“**畚锸もっこ**”は通常の語彙調査表には現れない語彙なので、これの方言語彙はデータが集まらず、確たることが言い難い。末尾の東南方言の二例は、成立要因が異なるので、除外する。広東雷州方言の例は恐らく、双声化により有氣音に変化したものだろう。湖南沅陵方言については全濁仄声が有氣音になる例が見られるから、“**凿木公**”に由来する、或いは“**凿**”と“**啄**”の混交によって“**啄 tsʰua¹³**”となつたものだろう。「(工具の)ノミ」に現れる“**凿**”が do¹³ となっているのが、この解釈の反証となりそうだが、これについては異なる方言層に属するものと考えておく。

当て字で“**畚锸木**”というような表記は見られないのだが(“**锛插木儿**”はある)、“**锛啄木**”という語形でしか“**啄**”の有氣音化が見られないで、“**畚锸**”への連想により有氣音に変化した可能性が高い。恐らく“**木**”が軽声で発音され、韻母が [ə] になっていること、或は兒化することで、語源の同定が不確かとなり、“**锛啄木(儿)** pən tsʰa mur → pən tsʰa mər” の第二、第三音節“**啄木儿 tsʰa mər**”から“**插门儿 tsʰa mər:** 門をかける”への連想が働いた(“**插门儿**”の方言データも未収集)のだろう。“**啄木(儿)**”から“**插门(儿)**”への変化は“**畚锸もっこ**”への連想が働いて、“**畚锸木(儿)**”のような形式になってから生じたものか、それとも“**畚锸木(儿)**”のような形式を経由することなく、“**锛啄木(儿)**”から直接変ったものか、現在のデータからは判断できないが、恐らく前者であろう。

河北灵寿：锛咤木 pən²² tsʰa³³ mu³¹ 啄木鸟 706

河北石家庄：奔咤木 pən tsʰʌ mu 啄木鸟 (官话) 1029

河北辛集：奔咤木 pei³³ tsʰɔə⁴⁵ mu¹¹ 啄木鸟 石家庄 1029

河北平山：奔咤木 peŋ²¹ tsʰa²¹ mu⁴² 啄木鸟 石家庄 1029

河北无极：锛乍木 啄木鸟 670

河北柏乡：锛扎木儿 啄木鸟 199

河北阜平：锛喳木儿 啄木鸟 794

河北新乐：锛渣木儿 啄木鸟 685

河北栾城：锛查木儿 啄木鸟 907

河北巨鹿：锛凿木 pən³³ tsau³¹ mu¹¹ 啄木鸟

河北平山：锛杈木儿 pəŋ²¹ tʂ^ha²¹⁻⁵⁵ mər²¹ 啄木鸟 839

河北行唐：锛杈木儿 pən²¹³ tʂ^ha³⁴ mər³⁴ 啄木鸟 685

河北平山：锛杈门儿 ɿ-pəŋ ɿ-tʂ^ha ɿ-mər 啄木鸟 普通 3713

河北赞皇：奔杈门儿 pəŋ⁵⁵ tʂ^ha⁵⁵ mər⁵⁵ 啄木鸟 606

河北高邑：锛插门儿 啄木鸟 655

河北获鹿：锛插(扎/ zha /)木儿 啄木鸟 县志 801

河北获鹿：锛插木儿 pẽ⁵⁵ tʂ^hΛ⁰ mur³¹⁻⁵⁵ 啄木鸟 116; “插” tʂ^hΛ¹³(入)

62

广东雷州：凿树公 ts^hak¹ ts^hiu²⁴⁻³³ kɔŋ²⁴ 啄木鸟 词典 308;

Cf. “剗(=剗)” tak¹ 詞典 306

tak ts^hiu kɔŋ → ts^hak ts^hiu kɔŋ

湖南沅陵：啄木公 ts^hua¹³ moʔ⁵³ kəw⁵⁵ 啄木鸟 研究 129 ←“凿木公”?

Cf. 凿子 do¹³ tsa⁰ 研究 134

河北獲鹿方言の県志の例は注目に値する。この表記から、実際には[pən tʂə mur] のような音声形式の段階で、既に“畚锸木(儿)”への連想が働いていることがその表記から窺われる。この表記からは、この語形において“插”が“扎/zha/”のように発音されていると解釈されていることが分かる。それがもう一つの獲鹿方言では“插”に対して tʂ^hΛと、軽声となっているが、单字音形式に一致している。平山方言など“杈”で表記されている例も同様に考えて良いだろう。これは§0.で紹介した山東博山方言の“童养媳”が特殊な変化をし、“养”が [ian] という音声形式になった段階で既に“圆”(单字音形式は[yan⁵⁵]) と結び付けられ、それが同様の変化を来たした周辺の方言では yan のように変わって“圆”的单字音形式と完全に一致してしまっているという状況と同じである。

§8.キツツキの擬人化（§6.3 様遣）

キツツキ語形の擬人化には“官”、“公”、“匠”といった要素が現れる。“匠”的例は希少で、管見の及ぶ限りでは4例しかない。以下の例を参照されたい。

湖南长沙：啄木官 tʂə ²⁴ mo ²⁴ kō ³³	啄木鸟 研究 126
湖南浏阳：啄木鸛 tso ⁴⁴ mo ⁴⁴ kō̯y ³³	啄木鸟 研究 121
湖南吉首：啄木官 tsua ¹¹ mun ⁰ kuan ⁰	啄木鸟 研究 120
湖南涟源：啄木官 tsua ³³ mə ³³ kuə ⁴⁴	啄木鸟 研究 131
安徽宁国：啄米官 tʂo ⁵⁵ mi ²⁴ kuə̯ ³¹	啄木鸟 省志 563
安徽广德：啄米官 tso ⁵⁵ mi ³⁵ kuə̯ ⁴²	啄木鸟 省志 571
湖南娄底：啄木公 tsua ³⁵ mo ³⁵ kɤŋ ⁰	啄木鸟 研究 144
湖南娄底：□木公 tsua ³⁵ mo ³⁵⁻⁵⁵ kɤŋ ⁰ cf. □ tsua ³⁵ ①啄(食)②叩击	啄木鸟 词典 61 词典 61
湖南沅陵：啄木公 tsʰua ¹³ mo ⁵³ kəw ⁵⁵	啄木鸟 研究 129
安徽太平：排工匠 tsə̯ ³² koŋ ³² zɪɔ̯ ²⁴ ← “啄木公” (← “啄木官”) + “工匠”	啄木鸟 省志 355
山东荣成：打木匠 ta ²¹³ m ⁰ tsiař ²²	啄木鸟 北大 97
山东文登：打木匠儿 ta ²¹³ mu ⁰ tsiaŋr ³³	啄木鸟 909
山东莱州：瞎木匠 cia ⁵⁵ mu ⁴² tsiaŋ ⁰	啄木鸟 121

山東方言の3例は周辺に分布する語形からみて、“啄木虫”が特殊な変化をしたものか、或いは“啄木鳥”がタブー語“鳥”的発音(tiau)を忌避して、niauのようにならずに、tsiaŋとなつたものか。現在のところ説得力のある解釈は提示できない。安徽省太平方言の例は恐らく、“啄木官”であったものが“啄木公”となり、“公”と“工”的同音関係から、“工匠”が結びつけられたものであろう。“工匠”とすることで、“公”ではなく“工”であると語源を明確にする意図が働いたともいえる。このような構成要素の同定を助けるために説明の要素を付与するようなやり方については以下の例を参考に挙げておこう。

“酒窝えくぼ”

河南郑州：酒窝儿 tsiou ⁵³ uor ²⁴	99
河南濮阳：酒窝儿 tsiou ⁵⁵ yuor ³³	报告 93
河南西华：喝酒窝儿 / he ²⁴ jiu ⁵⁵ wo ²⁴ / 脸蛋呈现窝形	597
河南漯河：喝酒窝儿 / he ²⁴ jiou ⁵⁵ uo ²⁴ / 酒窝	1031 ¹¹

¹¹ 漢字表記と音声表記が一致しない。漢字表記から“儿”を除去するか、音声形式の方でuo²⁴をuor²⁴に改めるかしなければいけないが、この問題は当面の議論には関わらない。

恐らくは“酒窝”の [tsiou] は「（飲む）酒」の“酒”だというように、理解を容易にすべく、西華、漯河方言では“喝”を付けたものだろう¹²。安徽太平の例も“啄木工匠”という語形の報告例は見つけていないが、初頭音節が陽韻尾となった後に“木”が脱落し、[tsan kuəŋ] のようになつた後に、[kuəŋ] は“工匠”的“工”であると認識させるべく、“匠”が賦与されたのであろう。所拠文献には“木”的音声形式が挙がっていないので、今それを仮に m- で示すと（成節母音 m である可能性もあり）、tsa m- koŋ → tsam m- koŋ → tsā koŋ となつた後に“公”を“工匠”にしたということである。安徽省では他に“～公”という構成の「キツツキ」語形の報告例を見かけないから、なお説得力に乏しいが、とりあえずの試案として挙げておく。

§9. “啄”的陽韻尾化

これまでに断片的に紹介しているが、以下に“啄”相当音節が陽韻尾になっている例を纏めて挙げる。

山东鄰城：断磨虫 tuə̯ ⁴¹⁻⁴³ mə ⁴¹ tʂ ^h uŋ ⁵⁵	啄木鸟 86、临沂 209
山东临沂：断磨虫 tuə̯ ³¹²⁻³¹ mə ⁰ tʂ ^h uŋ ⁵³	啄木鸟 山东方言词典 90
甘肃天水：啄木虫 _tuəŋ _mu _tsʰuəŋ	啄木鸟 普通 3713
甘肃天水：钻木虫 tsuan ⁵⁵ mu ⁰ tʂ ^h vən ²¹	啄木鸟 174
← tsuam mu ← “啄木” tsua mu	
河北鸡泽：端木丘的	啄木鸟 721 ← “啄木虫的”？“啄木雀的”？
河北鸡泽：端木鳩儿	啄木鸟 (=河北肥乡) 河北词汇 118
Cf.河北魏县：端树精	啄木鸟 河北词汇 118 ← “啄木虫”？
湖北安陆：锻磨佬 tan ³⁵ mo ⁵⁵ nau ⁵²	啄木鸟 FY94-4/311
← “啄木佬” ← “啄木鸟”？	

上掲例のうち、最初の3例（山东鄰城、临沂、甘肃天水）は概ね以下のよ
うな同化が起こって“啄”に-n 韵尾が生じたのであろう。

“啄木鸟” tʂauk muk d̥iuŋ → tuaŋ? mu? tʂ^huŋ → tua mu tʂ^huŋ → tuam mu tʂ^huŋ
 → tuan mu tʂ^huŋ → tuan mə tʂ^huŋ; 或 … → tuə̯ mu tʂ^huŋ →
 → tuə̯m mu tʂ^huŋ → tuan mu tʂ^huŋ → tuan mə tʂ^huŋ 。

¹² これは太田 2006 で取り上げた。濮阳方言の“窝儿” [yuor³³] には声調表記に誤りがあつたので、今、訂正して挙げる。

甘肃天水のもう一つの例の場合は、声母が *t*- ではなく *ts*- となっている点以外、恐らく成立のプロセスは変わらない。続く河北鶴沢の2例は語源が“啄木虫的”か、“啄木雀的”か、それともそれ以外の何かなのかよく分からぬ。河北では全濁平声が無氣音になるような変化は見られないが、この語形に限って“虫”が特殊な変化をしたのかも知れず、また“雀”も本来は中古精母字で、多くの地域で有氣音となっているのは、“鹊：カササギ”との混同若しくはタブー回避によるものと思われ、「キツツキ」のような語形で本来の無氣音の形式を保ったと考えることも可能である。魏県の例を含め、一元的に解釈するなら、“虫”を探るべきだろう。

以下は後続音節が“木”でないのに -n 韻尾が生じている例である。

河北广宗：钻钻木子 啄木鸟 626

河北广宗：钻得木 啄木鸟 河北词汇 118 ← “啄木(鸟)” + “打” ?

山东济宁：钻头木子 *tsuan*³¹²⁻²¹ *t^hou*⁴² *mu*²¹³⁻²¹ *tsɿ*⁰ 啄木鸟 山东方言词典
90

河北巨鹿：锻凿木 啄木鸟 697 ← “啄木(鸟)” + “凿” ?

河北鸡泽：端截木儿 啄木鸟 721 ← “啄木(鸟)” + “截” ?

河北广平：端树虫 啄木鸟 (=河北肥乡) 河北词汇 118

河北魏县：端树精 啄木鸟 河北词汇 118

内蒙黑河：禽堂木 *ɛtçʰin* *ɛtʰaŋ* *mu*³ 啄木鸟 普通 3713

河南杞县：叭叭端子 *p^ha*²⁴ *p^ha*⁰ *tuan*²⁴ *tsɿ*⁵⁵ 啄木鸟 854
← “锛锛啄木子” ?

河南长垣：梆端端 啄木鸟 572

树梆梆 (又) 啄木鸟 572

cf. 河南邓州：捣么官儿 啄木鸟 90

河北衡水：墩打木子 啄木鸟 851 ← “啄木(子)” + “鸽打木(子)” ?

河北衡水：顿打木子 啄木鸟 河北词汇 118

“啄”が本来の形式とかけ離れたものになることで、当て字がなされ、意味が曖昧になったので“啄”と“木”的間に“打”、“凿”、“截”などの類義語を嵌め込んで複合動詞化したことであろうか？

末尾の内蒙古黑河の例は

$t\zeta^hian$ tau mu → $t\zeta^hian$ taŋ mu → $t\zeta^hian$ tʰaŋ mu → $t\zeta^hien$ tʰaŋ mu ; 或いは
 $t\zeta^hian$ tau mu → $t\zeta^hian$ tʰau mu → $t\zeta^hian$ tʰaŋ mu → $t\zeta^hien$ tʰaŋ mu

のような変化を遂げたものであろう。*tau mu*→*tam mu*ではなく*tau mu*→*taŋ mu*としているのは、uの奥舌の盛り上がりが残っていることを想定したことである。同時に双声化が起こったと想定しているが、それが単にsyntagmaticな変化なのか、それとも民間語源その他の、何らかのparadigmaticな要因が絡んでいるのか、不明である。

河南杞県及び長垣の“端”は、“啄木”的合音となった姿かも知れない。以下のような変遷過程を想定し得る。

河南杞县

“锛锛啄木子” “*叭叭啄木子” “*叭叭墩木子”
 pən pən tuə mu tsɻ →……→ pa pa tuəm mu tsɻ → pa pa tuəm mɻ tsɻ →
 “*叭叭墩子” “叭叭端子”
 → pa pa tuəm tsɻ → pʰa pʰa tuan tsɻ

河南长垣

“梆啄木” “*梆墩木” “*梆端木” “*梆端”
 paŋ tuə mu → paŋ tuəm mu → paŋ tuam mu → paŋ tuam m̩ → paŋ tuam →
 “梆端端”
 → paŋ tuan → paŋ tuan tuan

ただ河南杞県で“叭叭”が何故 $p^h a$ $p^h a$ と有気音声母になっているのか理由が分からぬ。“鵠鏗鏗”的漢字表記で代表される語形では第二、三音節声母が $p^h - p^h -$ と有気音になっている例は全く見られない。類音の擬音語に置き換えたということかも知れない。長垣方言の例は併用語形に“树梆梆”があるので、類推によって“*梆端”も“梆端端”と同様の語構成になったことだろう。

§10.1 “啄” の声母 t- → l- タイプその1

語源が“鶴打木”、“鶴啄木”(<‘鶴啄木’)のタイプには“啄”的声母が弱化してl-になるものがある。太田2001で既に指摘した。

河北唐山：赚得儿木 $_t\text{ɕ}^{\text{h}}\text{i}\text{an}$ $_t\text{ər}\text{ mu}^{\text{z}}$ 啄木鸟 普通 3713

河北昌黎：鸽得木 $t\epsilon^h ian^{32} tə^0 my^{55}$ 啄木鸟 方言志 186

- 河北滦南：鵠得木子 $t\zeta^hian^{32}$ $t\theta^0 mu^{55}$ 啄木鸟 819
- 河北丰南：鵠达木子 $t\zeta^hiaen^{22}$ $t\theta^0 la^0 mu^{35}$ $ts\gamma^0$ 啄木鸟 635^{13}
- 山东平原：鵠打木子 / $qian^{21}$ da^{21} mu^{55} zi^0 / 725-726
- 山东武城：千打木子 啄木鸟 467
-
- 山东章丘：餐杂木子 啄木鸟 605
- 河南夏邑：参[$ts^h an^{214}$]子木 啄木鸟 527
- 山东济南：餐大木子 $ts^h \tilde{a}^{213-21}$ $ta^0 mu^{21}$ $ts\gamma^0$ 一种益鸟，… || 木，此处在轻声前不变调 词典 220
- 山东泗水：餐达木子 $ts^h \tilde{a}^{213-211}$ $ta^0 mu^{312}$ $ts\gamma^0$ 啄木鸟 657
- 山东邹平：鵠打木子 $ts^h a^{213}$ $ta^0 mu^0 t\theta^0$ 啄木鸟 864
- 山东淄博：鵠(骚)打木(梆)子 $ts^h \tilde{a}^{213-31}$ (so^{213-31}) $ta^0 mu^0 (paŋ^0)$ $ts\gamma^0$ 啄木鸟 2260
- 山东淄博：鵠打木 $ts^h \tilde{a}^{213-31}$ $ta^0 mu^0$ 啄木鸟 2260
- 山东汶上：参打木 $ts^h \tilde{a}^{213-21}$ $ta^0 mu^{213}$ 啄木鸟 153
- 山东邹城：鵠达木子 $ts^h a^{213-111}$ $ta^0 mu^{213-211}$ $ts\gamma^0$ 啄木鸟 762
- 山东莒县：鵠达木子 $ts^h an^{13-31}$ $ta^0 mu^{31-55}$ $ts\gamma^0$ 啄木鸟 志 95
- 山东平邑：鵠达木子 $ts^h an^{213-21}$ $ta^0 mu^{213-21}$ $ts\gamma^0$ 啄木鸟 (平邑、仲村一帶的叫法) 79
- 山东沂水：餐达木子 $tθ^h \tilde{a}^{213-21}$ $t\theta^0 mu^{21-44}$ $ð\gamma^0$ 啄木鸟 125、临沂 209^{14}
-
- 河北抚宁：鵠拉木 啄木鸟 河北词汇 118
- 山东曲阜：餐拉木子 $ts^h \tilde{a}^{213-211}$ $la^0 mu^{213-211}$ $ts\gamma^0$ 啄木鸟 63
- 山东嘉祥：餐烂木 啄木鸟 726

概略、以下のような変化を遂げたものと思われる。本文中に祖形として挙げる推定形式は、問題とする現代方言の諸語形を説明するのに必要な情報を備えた、中古音よりはかなり下ると思われる段階のものである。名詞接尾辞の“子”や兒化の要素を省いている。

① … → $t\zeta^hian$ tau mu → $t\zeta^hian$ ta mu → $t\zeta^hian$ $t\theta$ mu

河北唐山 山东平原 河北昌黎

¹³ 漢字表記と音声表記が対応しない。漢字表記の方が“达”の後に la^0 に対応する漢字一字がかけているか、音声表記の方で la^0 が衍字かのいずれなのか判然としない。

¹⁴ 後に挙げた文献では、“达”を“餐”に誤る。

- ②…→tç^hian tau mu→ts^hian ta mu→ts^han ta mu→ts^han la mu
 河北唐山 山东济南 山东曲阜
- ③…→tç^hian tau mu→ts^hian ta mu→ts^han ta mu→ts^han tə mu
 河北唐山 山东济南 山东沂水
- ④…→tç^hian tau mu→ts^hian ta mu→ts^han ta mu→ts^han la mu
 河北唐山 山东曲阜
 →ts^han lam mu→ts^han lan mu
 山东嘉祥

“鶴”が[ts^hian]となる例が見当たらないので、[ts^hian ta mu]という段階の想定は問題がありそうである。“餐”という漢字表記が見られるから、“鶴ついばむ”[tç^hian]から“餐食べる”[ts^han]への連想が働いて、[ts^hian]を経ることなく、[tç^hian]→[ts^han]と変化したということであろうか。先に示した[tç^hian tsau mu]～[tç^hian tsa mu]のような形式であれば、不完全な双声化を起して[ts^han tsau mu]～[ts^han tsa mu]のように変ることを想定できるが、キツツキ語形中の“啄”相当音節がt-で現われている形式にはそのような変化要因が内在するとは言えない。[tç^hian tau mu]～[ts^han tau mu]のような形式が殆ど見られることにも注目すべきである。[tç^hian tau mu]はかつては広く分布していた、或いは[tç^hian ta mu]と[ts^han tsau mu]～[ts^han tsa mu]の衝突で[ts^han ta mu]というような語形が生まれたというような可能性もあるが、いずれも報告例が少ないので確たることは言えない。

“打”、“得”などで表記される後続音節は先に示したように、破擦音で現われる場合もある。これらは“啄”が本字であると考えることで統一的に解釈できる。[tə]で現われる例があることから、韻母が弱化する傾向が見てとれるが、韻母に限らず音節全体が弱化していると考えるべきで、t→lは声母の弱化の現れに他ならない。河北撫寧方言の“鶴拉木”は初頭音節声母がtç^h-であるのか、ts^h-であるのか不明。“鶴”で表記しながら、音声記号はts^h-となっている例があるので、即断は慎まねばなるまい（河北邢台方言も同様）。また第二音節韻母も漢字表記は“拉”であるが、実際の音声は[la]ではなく、[lə]となっている可能性を排除できない。上掲例のうちにはこのような不確定要素が含まれるが、それが当面の議論に影響を及ぼす訳ではない。

“鶴”は渙母由来の団音字である。それが拗介音を保ってかつ尖音で現われるるのは以下の2例のみ。同一地点であるので、実質1例ということになる。

河南濮阳：枪木喳儿 $ts^hiaŋ^{33}$ mu⁰ tʂar³³ 啄木鸟 省志 195

河南濮阳：抢木渣 $ts^hiaŋ^{55}$ mu⁰ tʂA³³⁻³⁴ 啄木鸟 500

この語形の祖形は“鵠啄木”がメタテーゼを起して“鵠木啄”となっていたものであろうか。“鵠啄木”に溯源する形式について、その“鵠”が広範囲に亘って尖音となっていたとは考え難い。木をつつく様或いはその音から、「ヤリ」もしくは「鉄砲」を連想した結果ということであろう。

“鵠”が[ts^hiaŋ]のような形式で現れる例は希少である。恐らく先の直音のts^h- のケースとは別個に扱うべきものであろう。

§10.2 “啄”の声母 t- → l- タイプその2

“啄”相当音節の韻母が[lau],[laŋ]のようになっている例もある。先ずは該当例を挙げよう。

河北唐山：鵠刀木 啄木鸟 (=河北迁安、威县) 河北词汇 118

北京平谷：鵠叨儿木 tç^hian³⁵ taur³⁵ mu⁵¹ 啄木鸟 180

河南内黄：枪叨木 / qiang dāo mù / 啄木鸟 FPJ6/107

河北邢台：鵠老木 啄木鸟 河北词汇 118

河南鹿邑：千老木子 啄木鸟 753

河南郸城：枪老木子 / qiang²⁴ lao⁰ mu²⁴⁻²² zi⁰ / 啄木鸟 565

cf. 陕西韩城：鵠包包 / ɿqiang ɿbao bao / 啄木鸟 931

山东曹县：苍郎木子 / qiang láng mū dei / 啄木鸟 (西北) 593

以下、推定変化過程を示す。先の例同様の提示の仕方である。

① … tç^hian ta mu (tsɿ) → tç^hian tau mu → tç^hian lau mu

山东平原 北京平谷 河南鹿邑

② … tç^hian ta mu (tsɿ) → tç^hian tau mu → tç^hiaŋ tau mu → tç^hiaŋ lau mu

山东平原 北京平谷 河南内黄 河南郸城

→ tç^hiaŋ laŋ mu

山东曹县

③ … tç^hian ta mu (tsɿ) → tç^hian tau mu → tç^hiaŋ tau mu → tç^hiaŋ taŋ mu

山东平原 北京平谷 河南内黄

→tç^hiaŋ laŋ mu

山东曹县

漢字表記では“鵠啄木”となる祖形を想定しているので、最初の段階を tç^hian tau mu (tsɿ) → tç^hian ta mu (tsɿ) としている。tç^hiaŋ taŋ mu (tsɿ) という語形の報告例がないので、山東曹県の例は③ではなく、②のごとく、tç^hiaŋ lau mu (tsɿ) を経由して成立したものと看做すべきであろう。つまり山東曹県の成立過程について言えば、③より②の方が蓋然性が高い。なお第二音節が破擦音で現われる例では tç^hian/ts^han tsau mu (tsɿ) はあるが、tç^hian/ts^han tsan mu (tsɿ)、tç^hian/ts^han tsəŋ mu (tsɿ) のような陽韻尾韻化する例は見られない。

§11. “(鵠)啄木” — “头目”？ “鵠啄(木)” — “前头”？

“啄木”相当部分が“头目”と見做されたかのような例も見られる。以下の例を参照されたい。

“鵠啄木”

辽宁锦州：鵠透木 $\text{ɛtç}^{\text{h}}\text{ian}$ $\text{ɛt}^{\text{h}}\text{ou}$ mu³ [m³] 啄木鸟 普通 3713

河北滦县：鵠头木 啄木鸟 河北词汇 118

内蒙黑河：禽堂木 $\text{ɛtç}^{\text{h}}\text{in}$ $\text{ɛt}^{\text{h}}\text{aŋ}$ mu³ 啄木鸟 普通 3713

山东苍山：餐头木子 $\text{ts}^{\text{h}}\text{a}^{214}$ $\text{t}^{\text{h}}\text{ou}^{53}$ mu²¹⁴⁻³¹ tsɿ⁰ 啄木鸟 临沂 209

山东莒南：□头木子 $\text{t}^{\text{h}}\text{θ}^{\text{h}}\text{a}^{42-55}$ $\text{t}^{\text{h}}\text{ou}^0$ mu²¹⁻³¹ tθɿ⁰ 啄木鸟 21

山东莒南：残头木子 $\text{t}^{\text{h}}\text{θ}^{\text{h}}\text{a}^{42-55}$ $\text{t}^{\text{h}}\text{ou}^0$ mu²¹⁻³¹ tθɿ⁰ 啄木鸟 县志 787、临沂
209

山东济宁：钻头木子 tsuan³¹²⁻²¹ t^hou⁴² mu²¹³⁻²¹ tsɿ⁰ 啄木鸟 山东方言词典 90

第二音節“啄”相当音節声母の有氣音化は双声化の結果であろう。

① … tç^hian tau mu → tç^hian t^hau mu → tç^hian t^həu mu

北京平谷 辽宁锦州

② … tç^hian tau mu → tç^hian t^hau mu → tç^hian t^haŋ mu → tç^hiən t^haŋ mu

北京平谷 内蒙黑河

③ … tç^hian tau mu → ts^han tau mu → ts^han t^hau mu → ts^han t^həu mu

北京平谷 辽宁锦州

それが先ずあって、如上の変化を遂げたものであろう。“啄”相当音節が軽声で発音される例については、軽声化によって主母音が $a \rightarrow \emptyset$ となって、“前头”と結びつけられたということがあるかも知れない。そうであれば主母音の弱化の後に、第一第二音節が“前头”と結びつけられて、見かけ上の双声化が起こったということになり、以下の変化過程が想定される。

④ … $t\zeta^hian$ tau mu → $t\zeta^hian$ $t\emptyset u$ mu → $t\zeta^hian$ $t^h\emptyset u$ mu

北京平谷

辽宁錦州

但し $it\zeta^hian$ $t^h\emptyset u$ mu] は 1 例あるが、[$t\zeta^hian$ $t^h a$ mu]、[$t\zeta^hian$ $t^h au$ mu]、[$t\zeta^hian$ $t\emptyset u$ mu] に該当する形式の報告例が見当たらず、また [ts^han $t^h au$ mu]、[ts^han $t\emptyset u$ mu] に該当する形式の報告例も無い。或いは如上の連続的な推移ではなく、何らかの paradigmatic な要因による飛躍的な変化によって成立したのかも知れないが、説得力のある説明は思いつかない。

§12.1. “虫” – “锤”

以下の初めの 3 例は“锛树虫(儿 / 子)”が变成了ものであろう。木をつつく動作から「かなづち（で叩く）」を連想したことではないか？

河北宣化：锛树垂 $pəŋ^{42}$ su^{213} $ts^h u ei^{42}$ 啄木鸟 880 ← “锛树虫”

河北阳原：锛树锤儿 啄木鸟 670 ← “锛树虫儿”

河北阳原：锛树锤子 $\epsilon pə̃$ su° $\epsilon t\zeta^h u ei$ $t\zeta l$ 啄木鸟 普通 3713
← “锛树虫子”

河北康保：锛树虫 啄木鸟 980 (=河北怀安 638, 万全 959, 涿鹿 595)

山西娄烦：嘣树虫 $pəŋ^{33}$ fu^{54} $pf^həŋ^{33}$ 啄木鸟 研究 77, 县志 662

山西静乐：嘣树虫 $pəŋ^{32}$ fu^{53} $pf^həŋ^{32}$ 啄木鸟 648

山西静乐：嘣树虫 $pəŋ^{24}$ fu^{53} $pf^h\tilde{y}^{33}$ 啄木鸟 研究 214

河北张家口：锛树虫子 $pəŋ^{42}$ su^{213} $ts^h uŋ^{42}$ $ts\gamma^0$ 啄木鸟儿 1915

山西盂县：锛树虫子 $pə̃^{412}$ su^{44} $ts^h uə̃^{22}$ $ts\gamma^0$ 啄木鸟儿 34, 县志 631^{15}

山西阳曲：锛树铳子 $pə̃^{213}$ su^{353-55} $ts^h uə̃^{22}$ $tsə̃^2$ 啄木鸟儿 74

山西山阴：锛树虫儿 $pə̃^{313-31}$ su^{335} $t\zeta^h uΛr^{313}$ 啄木鸟 32, 县志 485

山西朔县：锛树虫儿 $pə̃^{213-21}$ su^{53} $t\zeta^h uər^{35}$ 啄木鸟 36

¹⁵ 县志は $ts\gamma^0$ を $ts\gamma^0$ とする。

- 山西怀仁： 镂树虫儿 pəŋ³¹ su²⁴ ts^huər³¹³ 啄木鸟儿 35, 县志 478
 山西原平： 镂树虫儿 pəŋ²¹³⁻³¹ su⁵³ tsuər³³ 啄木鸟 74¹⁶;
 Cf. “虫” ts^huəŋ³³ 53
 山西太原北郊区： 镂树虫虫 pʌŋ³³⁻⁵³ su³⁵ ts^huʌŋ³³⁻⁵³ ts^huʌŋ³³⁻³⁵ 研究 202

§12.2. “**锛树虫**” + “**钎子**”（“**鉗子**”）

“锛树虫” の “虫” が “钎子タガネ” と関連付けられたと思しきキツツキ語形がある。以下の例を参照されたい。

- 山西忻州： 镂树鸽子 pəŋ³¹³⁻⁴² su⁵³ tç^hiā³¹³⁻³¹ tə⁰ 啄木鸟 87
 → “鸽树锛儿”？“钎子”
 山西定襄： 镂树口子 pəŋ²¹³⁻⁴² su⁵³ tç^hiæ³¹ tə?² 啄木鸟 40
 山西文水： 楠梆雀 pu²²⁻¹¹ pu²²⁻³⁵ tç^hiū⁴²³ e²² 啄木鸟 II/71-72

“锛树雀” という形式の報告例がないから、一先ずは “锛树雀” ではなく、“锛树虫” が元になっているものと考える。西北方言では鳥名で “～虫” となるものに、他に「スズメ」（“飞虫”）、「カッコウ」、「キジバト」などがある。

麻雀

- 山东汶上： 小虫 ciɔ⁵⁵⁻³⁵ ts^huŋ⁰ 麻雀 153
 河南新乡： 小虫 ciau⁵⁵ tʂ^huŋ⁰ 麻雀 省志 194
 山东梁山： 小虫儿 ciɔ⁵⁵⁻²¹³ tʂ^hür⁰ 麻雀 507
 河南洛阳： 小虫儿 siɔ⁵³ tʂ^huw³¹ 麻雀 研究 143
 山西长治： 小虫儿 ciɔ⁵³⁴⁻⁵³ ts^huər²⁴ 麻雀 79
 山东邹城： 小小虫 ciɔ⁵⁵ ciɔ⁵⁵⁻²¹² ts^huŋ⁰ 麻雀 762
 河南商丘： 小小虫 siau⁵⁵ siau⁵⁵ tʂ^huŋ⁴² 麻雀 简释 410
 河北南和： 雀虫儿 tç^hiau⁵⁵ tʂ^huər²¹²⁻²¹ 麻雀 548
 山西运城： 飞虫 ci³¹ pf^həŋ⁰ 麻雀 38、县志 669
 山西平陆： 飞虫 ci⁴¹ pf^həŋ⁰ 麻雀 县志 578
 山西临猗： 飞虫儿 ci³¹ pf^həŋr²⁴ 麻雀 638
 山西垣曲： 喜虫 ci³¹ tʂ^huəŋ²³ 麻雀 624
 河南陕县： 西虫 ci⁵³ tʂ^huŋ²¹ 麻雀 619

¹⁶ tsuər³³ は ts^huər³³ の誤りであろう。

山西乡宁：西虫子 $\text{çi}^{53} \text{ts}^h \text{uəŋ}^{214} \text{ts} \text{ɿ}^{20}$ 麻雀 674¹⁷

布谷鸟

山西忻州：种谷虫儿 $\text{tsuəŋ}^{53} \text{kuə}?^2 \text{ts}^h \text{uər}^{31}$ 布谷鸟 词典 269

山西左权：姑姑虫 $\text{ku}^{31} \text{ku}^{31} \text{ts}^h \text{uəŋ}^{31}$ 布谷鸟 左权卷 307

山西大宁：姑姑圪虫儿 $\text{ku}^{31} \text{ku}^{31} \text{kə}?^{31} \text{ts}^h \text{uər}^{24}$ 布谷鸟 研究 164

斑鳩

山东鄆城：鸪鸪虫 / gūgūchong / 斑鳩 620

河南濮阳：咕咕虫 $\text{ku}^{33-34} \text{ku}^{34} \text{ts}^h \text{uŋ}^{452-42}$ 斑鳩 500

鶲鵠

陕西陇县：揭被虫 $\text{tçie}^{53} \text{pi}^{31} \text{ts}^h \text{uŋ}^{31}$ 鶲鵠 949

黑卷尾

陕西千阳：揭被虫 $\text{tçie}^{21} \text{pi}^{44} \text{ts}^h \text{uŋ}^0$ 黑卷尾 359¹⁸

杜鹃

陕西岐山：揭被虫 $\text{tçie} \text{pi}^{\text{?}} \text{ts}^h \text{əŋ}$ 杜鹃 689

陕西千阳：算黄虫 $\text{suæ}^{44} \text{xuəŋ}^0 \text{ts}^h \text{uŋ}^0$ 杜鹃 359

「スズメ」の場合は穀物に害を成すということで、タブー意識が働いて“长虫：ヘビ”“大虫：トラ”同様に対象を矮小化して“～虫”という語構成となったと解釈する余地があるが、「キツツキ」にはそのような可能性はない。“飞虫：スズメ”的“飞”が一様に fəi ではなく、 çi となっている点については議論が必要だが、今は指摘のみにとどめておく。“啄木虫(儿)”(§1.、4.)、“啄树虫”(§2.)、“叨树虫”(§6.10)などの形式と同様に、“锛树虫(子/儿)”もまた“～虫”で“～鸟”、“～雀”同様の構造を成していると見るべきであろう。上に示したように、「スズメ」、「キツツキ」以外にも報告例は希少だが、“～虫”という語構成の鳥名がある。そしてそのほとんどが西北方言の例である。

多くの北方方言では「（総称としての）小鳥」を“虫蚁(儿)”という。これは本来は昆虫と小さな鳥をひっくるめた言い方であったと思われるが、語釈が単に小鳥の総称、或いは鳥の総称としている文献が少なくない。こ

¹⁷ $\text{ts} \text{ɿ}^{20}$ 原文は $\text{ts} \text{ɿ}^{20}$ とする。同方言では入声が無いので、 $\text{tsə}?^{20}$ の誤りである可能性は無い。

¹⁸ 語釈未詳。後に掲げる“杜鹃”的直後に見える。日本語では「オウチュウ」と言い、スズメ科に属する鳥らしい。以下のサイトを参照した。“黑卷尾”
<http://baike.baidu.com/view/71594.htm> (アクセス日時 2014.9.23.11:32) なお角川大辞典 p.1253 には「（魚）オーチュウ」とあるが、（魚）は（鳥）の誤りだろう。

の総称が最も代表的な「小鳥」である「スズメ」の名称に転用される例が見られる。それが更に類推によって一部の鳥の名前にも適用されたということではないか。そして“虫蚁(儿)”同様、“小虫(儿)”も、恐らくは（昆虫及び）小さな鳥の総称であったものが、小鳥の代表格の「スズメ」の名称に転用され、それが類推によって、他の鳥の名にも“～虫”という語構成のものが生まれたのであろう。以下の例魯参照されたい。

小鸟 1

山东莒县：虫蚁 $tʂ^h uŋ^{53-13} i^0$ 小鸟、昆虫的总称 志 94

河南确山：虫蚁 / $cong^{42}$ yir^{312} / 小鸟儿 559

山东金乡：虫蚁儿 $ts^h uŋ^{42-55} ier^0$ 泛称禽虫类 116

河南洛宁：虫蚁儿 $ts^h uŋ^{53} ir^{21}$ 小鸟的统称 601

山西晋城地区：虫蚁儿 $tʂ^h uŋŋ^{324}$ $iər^0$ 鸟类，昆虫的泛称 218

麻雀 1

山东宁津：虫鵙儿 $ts^h uŋŋ^{53-44} ir^0$ 麻雀(旧时或称) 志 156

小鸟 2

山西陵川：小虫 $çiaŋ^{213-211}$ $tʂ^h uŋ^{53}$ 小鸟 46

麻雀 2

山东汶上：小虫 $çioŋ^{55-35}$ $ts^h uŋ^0$ 麻雀 153

小鸟 3

陕西澄城：飞虫 $çi^{21}$ $tʂ^h \kappaəŋ^{02}$ 飞鸟 615

麻雀 3

陕西合阳：飞虫 / xi^{31} [$pʃ^h$] $ɛŋg^{31}$ / 麻雀 803

“锛树钎子”という漢字表記の例は見ないが、山西忻州の“锛树鴿子”及び山西定襄の“锛树口子”は恐らく“锛树虫”的“虫”が“钎子：タガネ”と関連付けられたものだろう。前節で取り上げた“锛树垂”は河北省西北部に分布しており、山西中央部よりやや北に分布する“锛树鴿子”とは分布域が隣接していないし、どちらも報告例が希少なので、独自の変化である可能性が高く、両者を一つの変遷過程で説明すべきではないだろう。“锛树虫子”が同じキツツキ語形の“鴿”を含む語形、例えば漢字表記で示せば“鴿锛锛”($tʰian p- p-$)と混交を起して成立した可能性についても検討すべきだが、データが足りない。

§13.とりあえずの結語

小論では「キツツキ」の方言語形を対象に、その変化の諸相を取り上げ、議論した。既に触れたように、指示対象のズレはインフォーマント或いは記述者の誤解によるものも含まれているだろう。しかしこれに民間語源、類推などが絡み、本来の語形から大きく逸脱して変化する様の一端を紹介することはできたと思う。また *syntagmatic* な要因によって、本来の字音形式から離れて、語源が不明となった語形が民間語源によって再解釈され、更に変化が促進される状況についても紹介できたと思う。

今回もまたズボラで方言地図を提示することなく方言地理学的な議論を展開したので、データについて十分な知識の無い読者には或いは十分な説得力を示せなかつたかも知れない。私の批判されて当然の“老問題”である。（本文はこれで完結。続く(4)で参考文献、方言資料一覧を挙げる）